

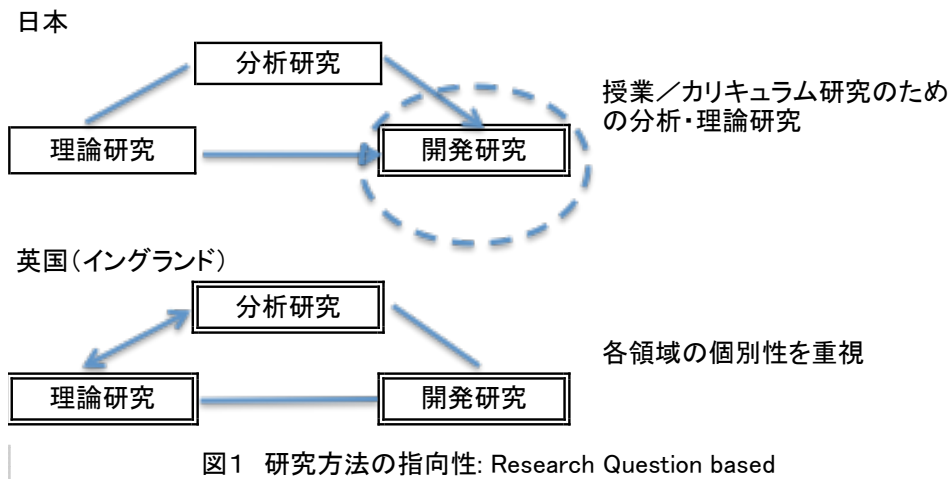
関心相関性に基づく研究方法論の選択 -わが国における社会科教育研究の特質と課題、そして可能性-

大阪大谷大学 田中伸
tanakano@osaka-ohst.ac.jp

1、はじめに—研究の指向性—

本研究では、以下3点を明らかにする。第1は、社会科教育研究における研究方法論的特質、第2は研究方法の選択原理（関心相関性）、第3は先行研究の分析に基づく研究の新しい方法論である。以上3点を通して、発表者に与えられた「新研究の提案」という課題に応じてゆきたい。

本研究の前提として、発表者は英国を事例に日英における市民性教育研究にみられる方法論の指向性として以下を指摘した¹。(Noboru Tanaka. Methodological Differences in Japanese and British Research on Citizenship Education, Childrens' Identity and Citizeniship in Europe Annual Conference, University of York, May,2012)



研究を暫定的に理論研究、分析研究、開発研究の3領域に分類²した場合、日本では開発研究を目的とした研究が多い。分析研究、理論研究等、個々の領域に分類出来る研究もみられるが、概略的には授業やカリキュラムの改革・改善を目的とする傾向が強い。対する英国は、3領域の個別性が重視され、各々の関連性は少ない。カリキュラム分析や概念分析を通して、例えば「シティズンシップとは何か」という理論研究を行うタイプの研究は比較的見られるため、分析研究と理論研究の綱がりは多少なりとも見受けられるが、日本にみられるような授業改善やカリキュラム改革に焦点を当てる傾向は少ない。もちろん、この定義に当てはまらない市民性教育研究も数多く、当然のことながら本仮説は引き続き検証、反駁してゆく必要がある³。

日本と米国の比較は、すでに草原(2012)が行っている⁴。発表者が示した日英と全く同じ形ではないが、両者には親和性が見られる。しかし、英米にみられるこの傾向は国に応じた研究のスタイルがあることを意味してはいない。研究者の依って立つ関心や方法論的バックグラウンドにより明らかにすること(内容)と、そのための手続き(方法)が異なることを意味している。当然のことながら、そこで明らかになる結論(目標)も大きく異なる。従って、国による特性や特殊性は傾向にすぎず、研究方法論に関しては当該研究者の立ち位置により異なるにすぎない。特に英米にみられる研究方法論は科学研究における一定のモデルが存在し、そのモデルに基づいて実施されている。従って、本研究では国という枠組みを一度保留し、可能な限り研究者の方法論という観点から分析してゆく。

2、研究方法論における哲学的前提と研究方法の特質

前章にて、英米には科学研究における一定のモデルが存在することを示した。では、そのモデルとはどのようなものであろうか。本章では研究方法論の見取り図を示す事で、英米で採用されている研究方法の特質や傾向を示してゆく。

科学研究における方法論は、実験的方法、統計的方法、比較例証法、逸脱事例分析法の大きく4つに分けることが出来る(高根,1979) 5。実験的方法はプレ・ポストテスト等を行うことを通して、一定の条件下における状況を検討する。独立変数(原因)と従属変数(結果)を研究者が設定し、人為的に統制することで因果関係を実証する、主に自然科学の実験方法に基づいてそれぞれの関係を分析する。統計的方法は、情報の統制ではなく、データのコンピューターによる解析という方法を通じて、実態に基づいて独立変数と従属変数を解析する方法である。比較例証法は、研究者の推論によって歴史や現象を解釈する。歴史的事実や史実と言われているものの資料を分析することで、自らの歴史観や解釈を編み出してゆく方法論である。逸脱事例分析法は、参加観察に典型的にみられる方法である。質的研究法に基づき、目の状況や事情に参加という手段を用いて明らかにする方法論である。

上記4点は、筆者の高根が米国留学中にスタンフォード大学で学んだ方法論に基づいている。この4類型は書籍出版から30年以上も経過した現在でも有効性が高い。この方法論のエッセンスを再解釈したものが以下になる。以下は英国で用いられている教育学研究における研究方法論の類型的整理である6。

表1 研究方法論の見取り図

特徴	質的研究法	量的研究法	統合的研究法(Mixed methods)
哲学的世界観 (Philosophical assumptions)	構成主義、構築主義 政策実現(唱導) 参加主義	実証主義	経験主義
探究方法	現象学的方法 グラウンデット・セオリー エスノグラフィー ケーススタディー 物語論	調査 仮説検証	通事的方法 共時的方法 変化
方法	オープンエンドの問い 現象的アプローチ テキスト、イメージデータ分析	クローズドエンドの問い 決定されたアプローチ (predetermined approaches) 数量的調査	オープンエンド、クローズドエンドの両者に 基づくアプローチ 質的、量的双方のアプローチ
事例 (研究者が良く行う研究スタイル)	<ul style="list-style-type: none"> 主体の立ち位置に関する分析 参加者の意見徴収 概念分析 現象分析 私的価値観の分析 参加者の状況分析 データの解釈 変化や改革のための政策づくり 参加者とのコラボレーション 	<ul style="list-style-type: none"> 理論の検証 事例の証明 変数の同定(identify) 問いや仮説の関係づけ 妥当性の検証 数的情報を使った観察と測定 先入観の無いアプローチ 統計的手続き 	<ul style="list-style-type: none"> 質的量的データの利用 複合的な理論の構築 様々な探究レベルの統合 視覚的資料の使用 質的量的実践の採用

John W. Creswell, Research Design, Sage,2009. p.17 "Qualitative, Quantitative and Mixed Methods Approaches に、pp.3-21を加えて発表者が再構成した。

上記から明らかな通り、目的や依って立つ世界観(哲学)に基づいて研究方法は異なることが分かる。本表が示す事は、研究者の明らかにしたい目的に応じた研究方法論を採用することで、実証的に分析や解釈が可能となることである。適切な方法論を採用することがより明確な分析や解釈が可能となる。すなわち、このモデルから逸脱する研究方法を取ることは、教育学研究のスタンダードから外れることになり、研究方法の妥当性をその都度検証する必要がある。大きくは英米の研究者はいずれもこのような研究方法のスタンダードを前提に研究を進める。発表者が先に国固有の論理を一旦保留した根拠はここにある。英米では、基本的に共通の研究方法論が存在し、その適切かつ目的に応じたその採用が旧来から求められているのである。

しかしながら、方法論の共通性は確認出来るものの、方法論の利用方法(その方法論を採用することで、何を明らかにしたいのか。すなわち、研究者の関心とそれに基づく研究内容)は国による傾向性を見る事が出来る。

3、関心相関性に基づく研究方法

前章にて、研究者は自身が描く研究目的や明らかにしたい対象に応じて適切な研究方法を選択することを論じた。研究目標や目的、また内容に基づいた研究方法の採用について、西條は関心相関性という概念を基に以下の点を指摘する⁷。

存在、意味、価値は主体の身体・欲望・関心と相関的に規定される。(中略)。自らが感じる価値は「対象に存在するモノ」ではなく、「欲望や関心に応じて時々刻々立ち現れるコト」として受け取ることが可能になり、それによって異なる関心や領域の仕事に対してより妥当な評価をすることが可能になる。

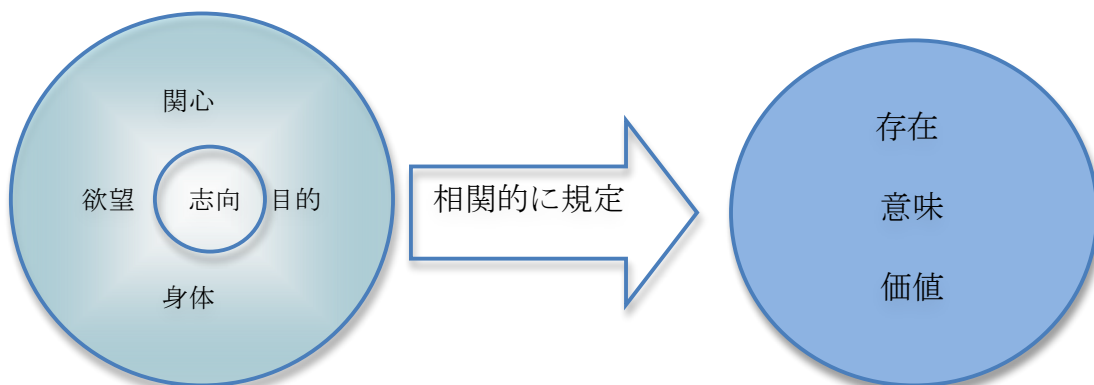


図2 関心相関性の原理

関心相関性とは、「価値や意味が身体や欲望、関心といったものと相関的に規定される側面があることを可視化する認識装置」である。特定の研究者により行われる研究は、各々の関心に沿った目標や内容が設定される。方法論は、明らかにしたい目標に基づいて上記3点から選ぶ形になる。このことは、同様に日々の授業も説明が可能である。特定の授業者により実施される授業は、その地域や固有の文化意識や教科書が内在している様々な価値や信念に基づき成立している。それらを無視して授業を成立させることは困難である。教師は教材や学習材の選択、また、教授活動の中で、社会的・文化的、また、個人的価値観や意味づけを基盤に授業を展開する⁸。

研究方法を関心相関性に基づいて分析する場合の焦点は2点である。第1は「なぜこの方法論を採用するのか」である。研究の目的・内容に合わせた方法論となっているか、適切なRQの設計がなされているかを問う。第2は「どのような手続きで何を明らかにしているか」である。西條はこれを「構造化の軌跡」と説明する。明らかにしたい事柄を証明するために、どのような条件設定を行い、それをどの方法（各方法論の下位に位置する方法的手段）で明らかにするのかを徹底的に議論する。この2点を分析することで、研究内容と目的、またその前提として方法論の妥当性を分析することが可能となる。

4、構造化の軌跡の実際（新しい研究の方法論）

本章では、論文に見られる構造（構造化の軌跡）を示す。この方法論を採用する根拠は、上で指摘した通り、構造化の軌跡を明らかにすることで研究方法の妥当性を検証出来ることにある。論文に見られる構造化の軌跡を明らかにすることで、研究の方法論的特質、妥当性、また限界を分析する事が可能となる。

本稿では、事例として英国市民性教育の教科書を分析した2つの論文を取り上げる。当該論文では、両者ともにHoddler Muray社が発行するThis is Citizenshipという同じ教科書を分析している。同じ教科書を分析する2種類の論文構成（論理を構造化する軌跡）を解き明かすことで、各研究が持つ方法論を示してゆきたい。なお、論文の選択基準は、独立変数として英米の授業実践形態、従属変数として論文構成、分析の観点は関心相関性である。分析する論文は以下2つの研究である。

・片上宗二「Hoddler Muray 社シティズンシップ教科書 This is Citizenship の場合-『螺旋的發展構造』型で『知識・技能・参加（実践）』融合型-』『我が国を視点にした英国シティズンシップ教育の計画・実施・評価・改善の研究-地方行政局と大学と学校が連携した教育 PDCA 開発-』平成 17 年度～平成 20 年度科学研究費補助金研究報告書、研究代表者池野範男、2009 年 3 月発行⁹。

・吉村功太郎「英国シティズンシップ教育のカリキュラム論的検討（2）-2008 年版テキスト内容の構成」第 23 回日本公民教育学会全国研究大会発表原稿、2012 年 6 月¹⁰。

両研究は、共にシティズンシップ教科書 This is Citezenship の内容構成を明らかにすることで、教科シティズンシップが持つ学習論を明らかにすることを目指したものである。

（1）規範的学力構造を明らかにする方法論

まず、第 1 は片上氏による研究である。まず、片上の研究は以下の論理を採る。

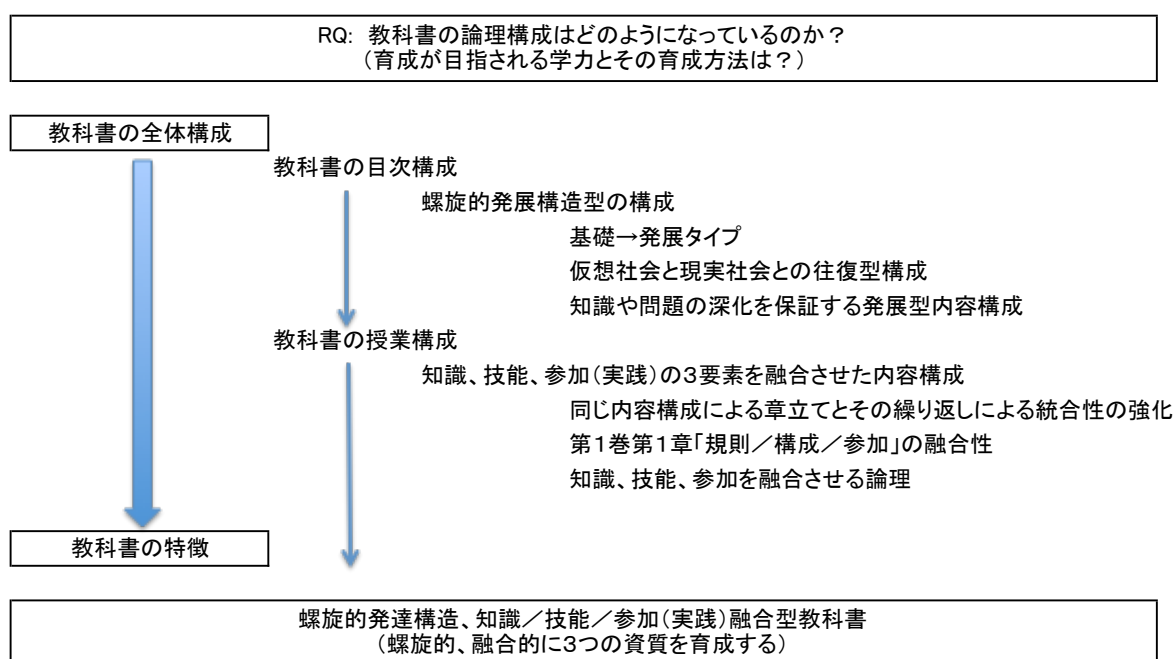


図3： 片上論文の論理構造

片上氏は、RQ (Research Question) として「教科書の論理構成はどのようになっているのか」と設定する。氏は明示していないが、この RQ には「育成が目指される学力とその育成方法は」という隠れた問いが含まれている。この RQ を解き明かす手段として、教科書の全体構成を示すものとなっている。最終的には、螺旋的發展構造、並びに知識／技能／参加（実践）の融合が目指された教科書であり、本教科書を学習することで螺旋的、融合的に知識、技能、実践力の育成が可能になることを明らかにしている。

片上氏の論理の特徴は以下 2 点である。第 1 に、教科書の構造を明らかにすることで教科書執筆者が意図していないことも含めた「教科書構成の論理」を明らかにする点である。第 2 は、「教科書構成の論理」が学習構造と直結している点である。教科書に書かれている内容の選択と配列を重視し、その論理構造が子どもに育成が目指される学力構造と見なす点である。以上 2 点が本研究の特徴である。

(2) 形成的学力構造を明らかにする方法論

次に、吉村論文は以下の論理構造を採る。

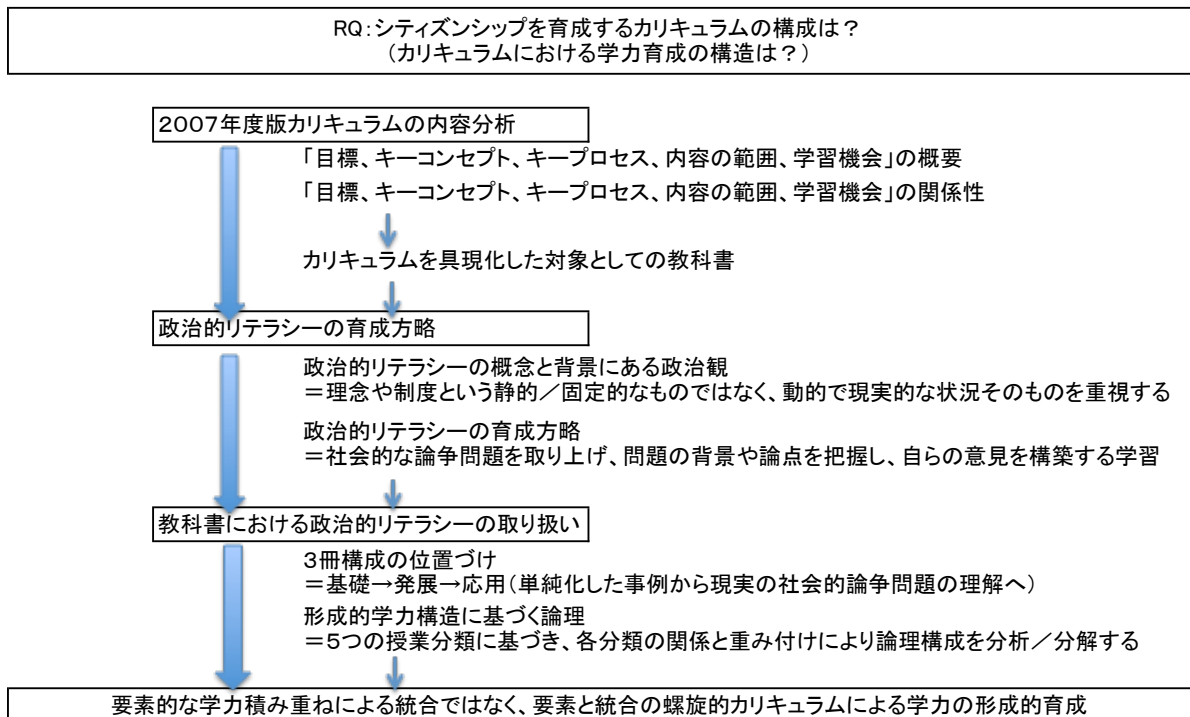


図4: 吉村論文の論理構造

吉村氏の RQ は「シティズンシップを育成するカリキュラム構成は」というものである。ここには「カリキュラムにおける学力育成の構造は？」という問いが隠れている。氏は、まず2007年度版カリキュラムの内容分析を行い、目標、キーコンセプト、キープロセスの内容、それらの関係性を分析する。次にカリキュラムにおける重要概念である「政治的リテラシー」に着目し、その概念と背後にある政治観、並びに育成方略を分析する。その後、**This is Citizenship** という教科書を取り上げ、政治的リテラシーの具体的な育成方法と論理を明らかにしている。

吉村氏の論理の特徴は以下2点である。第1に、教科書の構造（内容選択と配列の論理）を絶対視していない点である。英国（イングランド）では、教科書は複数ある学習材の1つである。教科書に書かれている内容と配列の重要性を保留している点が第1の特徴である。第2は、学力を形成的に捉えている点である。内容や配列の順序性ではなく、「つまみ食い」的に学習した場合も含めた各単元間で育成が目指される資質の関係性を問題にしている点である。

(3) 2つの研究にみられる方法論の相違

両者の大きな違いは、学習が行われる実態的状况を考慮に入れるかどうかにある。すなわち、発表者の言葉で示すと文化的状況と教科書の論理構造の関係性を分析するかどうかという点の違いである。片上氏に見られる研究は、いわゆる教科書の論理構成を明らかにすることで、教科書執筆者が意図していない点も詳細に分析することで、教科書構成を論理的に分析することを目標とする。すなわち、学習の実態や教室の状況をその判断材料から外すことで可能な限り分析的に対象を明らかにしようとする。

対する吉村氏の研究は、英国で実施されている教科書使用の実態を前提とする。「つまみ食い」としての教科書使用や、様々なメディア教材を含めた授業展開を前提とした教科書使用を考慮に入れる。このような研究方法を採用することで、教科書が持つ詳細な論理構成は明らかにしない。しかしながら、育成が目指される学力の形成的な育成方法を解き明かすことを目指す。

両者の研究は、各自の関心相関性に基づき行われている。自身の研究環境や視点により明らか

にする目的が異なる。そのため、両者に優劣は無い。互いに同じ教科書を分析してはいるが、明らかにしようとする目的（研究目標）が大きく異なるのである。発表者の関心に基づいた場合、吉村氏の研究は、教科書分析研究の次元を「形成的学力構造」という観点を入れ込むことでその汎用性を広げている研究と言える。

5、おわりに一発表者が進めている比較研究の事例-

前章では、発表者が考える「新しい研究」の事例を示した。本章では、発表者が近年進めている研究の概略を紹介する。発表者は主に以下3つの研究を進めている。

- (1) 方法論の分析研究
- (2) 市民性意識と授業の相関関係の分析研究
- (3) 授業構成論の比較研究（仮：アジア型とヨーロッパ型）

第1は、以下の研究である。

- ・田中伸「英国の市民性教育研究の方法論的特質-3つのアプローチにみられる研究目的・内容・方法の特質と課題-」『社会科教育論叢』第48号、2012、pp.87-96。
- ・Noboru Tanaka. Methodological Differences in Japanese and British Research on Citizenship Education, Childrens' Identity and Citizenship in Europe Annual Conference, University of York, May,2012. (印刷中)

各研究のRQと論文構成を比較することで、各研究方法の特徴と課題を明らかにする研究である。原理として関心相関性を応用することで、各々の研究関心とその問題意識、また論述の方法と追究の手続きを明らかにする研究である。本来は質的調査としてインタビューを行う必要があるが、現段階では暫定的に主に文献研究を中心に行ったものである。

なお、本発表で示した研究も、当該領域の研究に分類される。本研究は、論文構成（構造化の軌跡）を示すことで、研究者の関心をどのような方法で明らかにするかを示した研究である。すなわち、関心相関性に基づき研究が構造化される軌跡（方法論）を解き明かす研究である。

第2は、以下の研究である。

- ・Noboru Tanaka, "The relations of citizenship and the educational practice in Japan-in the educational practice of law related education-", *Lifelong Learning and Active Citizenship, Children's Identity and Citizenship in Europe*, 2011, pp.276-287.
- ・田中伸「シティズンシップ教育実践の多様性とその原理-学習環境を規定する市民性意識の解明を通して-」『教育方法学研究』日本教育方法学会、第36巻、2011、pp.39-50。

本研究は、日英の授業実践が異なる根拠として、日英における市民性意識の相違を設定し、各国では自国の市民性意識に基づいた実践を実施していることを明らかにした。また、同じテーマ（選挙）を事例とした授業を分析し、授業論の相違を示した。量的調査を基本とし、市民性意識に関するアンケート調査を通して個々人が持つ意識（文化）と教育実践の関係を分析した研究である。

第3は、授業構成論の比較研究である。本研究は授業構成の違いをアジア型とヨーロッパ型に分類し、その手続き（授業の作り方）を比較分析する研究である。先に国によるラベリングの不要論を指摘したため、早速矛盾している。しかし、「方法論に関する国家枠組みに基づいた違いは少なく、方法論は研究者の関心相関に基づいて決定される」ことは現時点で仮説にすぎない。研究を進めてゆく上で、本仮説を検証してゆく。

例えば、現在、ギリシャ西マケドニア大学の Ifigenia Vamvakidou 氏と共同で以下の研究を進めている。ギリシャでは日本同様授業研究が盛んである。研究者や実践家が多数の指導案を作成し、それをもとに研究授業を行っている。しかし、作成する指導案の項目や重視する内容が大きく異なる。両国における授業構成論の研究手続きを比較することで、授業論やその背景としての文化的状況を明らかにする研究である。

本研究は未だ発展途上であり、現在計画中のものである。私達（Ifigenia Vamvakidou 氏と田

中) が仮説として設定している「アジア型とヨーロッパ型」の授業研究が存在するかどうかは分からない。そもそも、方法的な大きな違いが出てくるかも分からない。現在進行形の研究である。

¹ Noboru Tanaka. Methodological Differences in Japanese and British Research on Citizenship Education, Childrens' Identity and Citizeniship in Europe Annual Conference, University of York, May, 2012. 発表者は本発表において、英国、日本にみられる典型的な研究方法論を採用する各3本(計6本)の論文を分析し、各論文の Research Question、並びに論理構成に基づいて研究方法の特徴を明らかにした。分析した結果、日本の研究は比較的授業改革や教材作りを行うことで教育論の改革を目指したものが多く、対する英国は3つの領域が分離しており、各々の領域における原理や理論、多様性を明らかにするものが多く示した。しかしながら、この特徴は極めて暫定的であり一般化することは出来ない論理であることを重ねて示した。本発表は、論文として2012年12月頃出版予定。

² 社会科教育研究を理論研究、分析研究、開発研究の3つに分類出来る根拠、並びに各領域に類型出来る先行研究については、すでに以下で詳細に論じている。拙稿「シティズンシップ教育実践の多様性とその原理-学習環境を規定する市民性意識の解明を通して-」『教育方法学研究』日本教育方法学会、第36巻、2011、pp.39-50。そのため、ここでは改めて繰り返して論じることはしない。

³ 詳細は前掲1をご参照願いたい。

⁴ 草原和博「日本の社会科研究の方法的特質-シェーバーと森分の研究観の設定と相違を手がかりにして」『社会科教育論叢』第48号、2012、pp.97-108。

⁵ 高根正昭『想像の方法学』講談社、1979。

⁶ John W. Creswell, *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches*, Sage Publications, Inc, 2009.

⁷ 西條剛央『構造構成主義とは何か』北大路書房、2005、pp.54-55。

⁸ 発表者は英国と日本の比較研究の中で、授業が教師の持つ関心(目標)と子ども達が持つ関心(意識や価値観)に基づいて設計されることを明らかにした。詳細は以下の論文をご参照願いたい。・田中伸「シティズンシップ教育実践の多様性とその原理-学習環境を規定する市民性意識の解明を通して-」『教育方法学研究』日本教育方法学会、第36巻、2011、pp.39-50。

⁹ 片上宗二「Hodder Murray 社シティズンシップ教科書 This is Citizenship の場合-『螺旋的發展構造』型で『知識・技能・参加(実践)』融合型-」『我が国を視点にした英国シティズンシップ教育の計画・実施・評価・改善の研究-地方行政局と大学と学校が連携した教育PDCA開発-』平成17年度～平成20年度科学研究費補助金研究報告書、研究代表者池野範男、2009年3月発行

¹⁰ 吉村功太郎「英国シティズンシップ教育のカリキュラム論的検討(2)-2008年版テキスト内容の構成」第23回日本公民教育学会全国研究大会発表原稿、2012年6月